

# がんの情報探しを支援

## 提言

慶應大先端生命科学研究所  
「からだ館がん情報ステーション」  
プロジェクトリーダー  
あきやま 美紀



市民の皆さんの闘病やみどりの経験も、私たちは貴重な「資源」とだと考えている。毎月開催しているがん患者サロンは、闘病経験を分かち合う場の一つだが、自分が乗り越えてきた経験を地域に還元しようという人の輪も広がり始めている。

先日は、「がんサバイバーが来る。やがて訪れる死を意

人生を生きたいと多くの人が願っている。「人づくり」「役割づくり」で、自らの闘病経験を語つてくださった。一方で生産年齢人口（15～64歳）は半分になる。元気な高齢者は「支援する側」に回らなければ、社会が持ちこたえられない。これまで「支援を受ける側」と見なされてきた人も、できることをしたり、何か役割を担つていくことが望まれる。

地域住民の情報ニーズに適合したコミュニニケーション活動を、行政機関、医療機関、地域の企業などと協力しながら進めてきたことにほかなりない。こうした住民エンパワーメントの取り組みが各地に広がっていくことを心から願っている。

（東京都在住）

談員が情報探しをサポートしている。

（がん経験者）の方が、地域の保健指導員の研修の場で、自らの闘病経験を語つてくださった。

本ヘルスサポート学会の学会賞（実践部門）を受賞した。

識しながら、最期まで幸せにな行動を起すにかかる。その鍵は、「場づくり」であり、私たちの活動もその一翼を担つていると考へている。こうした活動が高く評価され、このたび、慶應大先端生命科学研究所「からだ館がん情報ステーション」は、日本情報ステーション学会の学会賞（実践部門）を受賞した。

（東京都在住）

「からだ館がん情報ステーション」を、鶴岡市の鶴岡タウンキャンパスに開設して丸6年が経過した。国民の2人に1人ががんにかかる現在、地域住民の誰もががんについて学べる場が必要と考えて運営してきた。

大切な意思決定をするには情報サポートが不可欠ということは、末期がんの父をみつた時に痛感していた。からだ館は、キャンパスの図書館の一角を借り、がんに関する書籍やパンフレット、闘病記などを数多く取りそろえ、相

## 患者サロンも開催 ■ 高齢者も支える側に